著苧壹條長三丈五尺廣壹尺七寸　直稻貳拾肆束○下略

樽種類

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕樽

似箱而横狹者名指樽、似桶而矮者名匾樽、其有兩手者名柳樽、高長有兩手者名手樽、

〔尺素往來〕來月朔日相當初午候、稻荷御參詣勿論候歟、然者於還坂邊、例式之差樏一個、縛樽兩三、檜破子、取肴風情可令用意候、

〔筆の靈後篇六十二〕縛樽といふは、職人盡歌合のさかつくりの畫にある樽の如き類の物を、呼分て云名なり、細き木を竪ざまに多く集め造りて、たがにて締めたるなり、結桶と云稱と同じ義なり、

〔享保集成絲綸錄十九〕元祿十七申年○寶永元年二月

覺

一自分之取かはしに蕨樽わら卷樽可爲無用候、柳樽其外かろき樽を可被用事、○中略

右之通被仰出候間、急度可相守候、以上、

〔運歩色葉集屋〕柳樽

〔書言字考節用集七器財〕柳樽ヤナギダル松永久秀始製レ焉

〔貞丈雜記七酒盃〕一柳樽と云は、柳の木にて作りたる手樽の事也、今はひの木さわらの木などにて、平くたらひの如く作りたるを柳樽と云、古の柳樽とは大に違なり、古柳を用ひし事は、柳木はやはらかなる木にて、水氣にあへば木ふやける也、樽にして酒もらぬ故に、柳を專用ひし也、

〔貞丈雜記七酒盃〕一又云、柳一荷など云は、柳にて作りし樽へ酒を入る故に、柳幾箇と云と申說宜しからず、文明日々記云、二月廿七日、御方御所に能有、御樁五荷二荷あま野三荷百濟寺云々、御湯殿上の日記ニ、イナカ幾荷と云事あり、近年諸藝方賣買代物に云、やなぎの代古酒百文別三枚、新酒百文